

2024年4月21日

復活節第4主日

菊地功大司教 メッセージ

復活節第四主日は、善き牧者の主日です。ヨハネ福音には、「わたしは良い羊飼いです。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」という主イエスの言葉が記されています。

主が羊飼いなのですから、彼に従っているわたしたちはその羊飼いに導かれる羊の群れであります。羊飼いと羊の関係という、羊飼いが先頭に立って羊の群れを導いている姿を想像しますが、実際の羊飼いは、群れの先頭に立つというよりも、少し離れた場所から、時には後ろから、常に見守り、時には正しい方向へ進むようにと追い立てる存在です。

教会における牧者のイメージも、ともすると先頭に立って、「私についてこい」と群れを導く姿を想起しますが、主イエスの語る牧者は、ご自分が賜物としていのちを与えられたわたしたちを、ご自分の羊、ご自分の一部として心にかけて、傍らから見守る存在です。しかもご自分の羊たちを愛するがあまり、その羊のために命をかけるまで宣言されます。その上で、イエスは、「ひとりの羊飼いに導かれ、一つの群れになる」ことが最終的な目的であるとして、誰ひとり排除することなく、賜物としていのちを与えたすべての人を、自らの群れに取り込むことが神の望みであることを明示します。

良い羊飼いです。主イエスは、「私は自分の羊を知っている」といわれ、同時に「羊も私を知っている」と断言されています。果たしてわたしたちは、主を知っているでしょうか。どこで主と出会ったでしょうか。日々の生活の中で出会う人、とりわけいのちの危機に直面している人、人間の尊厳をないがしろにされている人、忘れ去られている人のうちにこそ、主はおられます。

教会はこの復活節第四主日を、世界召命祈願日と定めており、司祭や修道者への召命のために特に祈りを捧げる日としています。東京教区では、この主日の午後、教区の一粒子会が主催して、東京カテドラル聖マリア大聖堂で召命祈願ミサが捧げられます。

召命を語ることは、ひとり司祭・修道者の召命を語ることにとどまりません。キリスト者すべての召命についても考える必要があります。司祭・修道者の召命のために祈ることは重要ですが、同時に信徒の召命が生かされるように祈ることも重要です。

わたしたちは就職活動や求職活動のように、召命を人間が生み出すことはできません。それは神からの賜物です。召命は、神からの呼びかけです。あの日、ガリラヤ湖の湖畔で、イエスご自身が声をかけられたように、徹頭徹尾、神からの一方的な呼びかけです。主イエスは、常に呼びかけておられます。私たちに必要なのは、その呼びかけに耳を傾け、前向きに応える勇気を、多くの人を持つことができるよう、祈りをもって励ますことでもあります。ですから祈りましょう。召命が増えるようにではなくて、主からの呼びかけに応える勇気を持つ人が増えるように祈りましょう。

呼びかけておられる善き牧者、主イエスと会いましょう。わたしたちは教会共同体の中で、ミサとともに集う中で、告げられる御言葉のうちで、生け贄として捧げられる御聖体のうちに、そこにおられる主と出会います。困難に直面する人、忘れられた人、助けを必要とする人との関わりの中で、小さな人々の一人ひとりのうちにおられる主と、出会います。主はいつも呼びかけておられます。